

## 歴史よもやま話 8 掃苔記 ② 本多作左衛門重次

本多作左衛門重次は、松平清康・広忠・家康の三代に仕え、三河一向一揆の平定に活躍した武将であり、高力清長・天野康景と共に岡崎城の奉行であった。岡崎の人々は「仏の高力、鬼作左、とちへんなしの天野康景」と言ったそうである。作左衛門は気短で頑固者として恐れられ、「鬼作左」と呼ばれるようになった。天正3年(1575)長篠の戦のとき、妻に宛てた「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」は、手紙の簡潔な手本として有名。お仙は嫡男の仙千代のことで、後に成重と名乗る。「一筆啓上」の書簡碑は、越前丸岡城や取手市青柳の本願寺(作左衛門の菩提寺)に建立されている。

天正14年(1586)5月、秀吉は妹旭姫を家康に嫁がせ、同年9月大政所を人質とすることを約束して上洛を勧める。家康は承諾する。10月大政所は岡崎城に着く。旭姫が浜松城から大政所に会いに来る。護衛役の作左衛門は、大政所と旭姫の居所に薪を山と積んだ。親子は「いつ作左衛門が薪に火をつけるか」と恐れ戦いた。11月家康は岡崎城に戻った。帰国した大政所は、岡崎城における作左衛門の乱暴振りを伝えた。このことが親孝行である秀吉の胸に刻みこまれ、後年作左衛門の蟄居処分に繋がってゆく。

秀吉は天正18年2月、小田原征伐のため、12万人の大軍を率いて京都を出発。そして3月中旬駿府城にやってきた。この時の駿府城城代は、本多作左衛門である。秀吉は使いを出して「駿府城をわが陣所として使いたい、早々に明け渡せ」と命じた。ところがこの使いに対して作左衛門は「この城の城主は家康公だ。家康公の命令がないので、たとえ関白殿下の命令であっても城を明け渡すわけにはいかない」とこれを拒んだ。使いの者は、ありのまま秀吉に報告した。秀吉は代わりの者を長久保(沼津)にいる先鋒隊の家康に派遣した。3月20日家康は駿府に帰り、秀吉に謁見し、饗応した。

作左衛門は、度重なる無礼を秀吉に咎められ、家康もやむなく上総古井戸(君津)に蟄居を命じ、無役3千石を給す。後に領地を下総相馬郡井野に移される。作左衛門は慶長元年67歳で死去する。取手駅から歩いて15分ぐらいの台宿2丁目の「お墓山」に作左衛門の墓がある。墓地は柵で囲われており、入り口に「史蹟 本多重次墳墓」の石碑が建っている。

作左衛門の嫡男成重は、慶長18年(1613)北の庄城主松平忠直の付家老として越前丸岡城に入城。寛永元年(1624)忠直改易後に大名となり、福井藩から独立して丸岡藩4万6千石を領した。しかし、4代重益は藩政を家臣に任せ、さらに酒食に溺れたため、重臣間に争論が起こり、監督不行き届きを問われ、元禄8年(1695)3月、領地を没収された。宝永6年(1709)赦免され、2千石を与えられ旗本となった。丸岡城近くの本光院には、本多家歴代の墓所があり、左から初代成重、成重の父作左衛門重次、2代重能、3代重昭の五輪塔が建ち並んでいる。

参考文献：工藤寛正編 江戸時代全大名家事典

(中村一美記)